

令和2年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣官房長官賞

ふるさとを未来につなぐ農山村体験交流

広島県三次市 特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう



子どもたちの声は宝物

ここは、広島県北部の山間の町。標高639メートルの岡田山と6本の谷川に沿って点在する集落が風景を創る。86世帯173人高齢化率56%のこの地域にとって、「子どもたちの声」「若者の姿」は宝物。そして、子どもたちや若者にとって「おじいさんおばあさん」や「里山」からの学びは豊かでかけがえないもの。その子どもたちや若者は地域の外からもやってくる。

ないからいそもあるもの

1998年、この地域に2軒あった小さな商店の1軒の灯が消えた。2003年には上田小学校が廃校となり、2006年には最後の商店

が閉じ、デマンドバスも移動販売車も休止、年々生活機能が衰退していった。

2002年、上田小学校跡地活用プロジェクト委員会が結成された。校舎は平屋の木造で、雨漏りなど老朽化の課題はあるが時を重ねた魅力ある佇まいをしていた。

「更地にするか活用するか地域で話し合ってください。但し活動費は自主財源で」と市から説明を受けた町内会役員は、会議を重ねた末、「思い出深い母校だが、後世に負の遺産を継ぎたくない」と更地化を決断しかけていた。しかし「若者の声を聞こう」と公募委員を募集。「校舎を地域のシンボルとして残し、都市農村交流施設として活用する」案が検討材料にあがった。提案の具体化に向けたワークとし、委員の一人が水俣の吉本哲郎さんの地元学「あるものさが

し」を紹介。これを自分たち流に取り入れ、交流イベントの資源を探ることとなった。

「これといった有名な観光資源もないこんな山奥に、来る人がいるのか」「温泉でもあればいいが」「街灯もない。上下水道も通っていない」「ないもの」ばかりが浮かび、ないものを出し尽くした時「星が見えるのは街灯がないからだ」ということに気づいた瞬間があった。「泳げるような川はないが、川の赤ちゃん（源流）の一滴がある」「上水道はないが、おいしい山水・井戸水がある」「店はないが、自給的な暮らしがある」、『ないからこそあるもの』があるではないか！

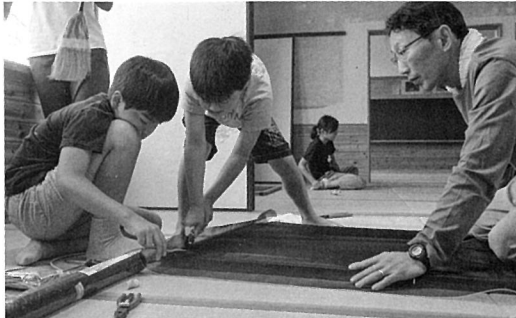
当団体名にある「ほしはら」とは、旧小学校の校歌に出てくる言葉で、満天の星が見える原っぱのことだ。街のような明かりがなく、真っ

暗闇だからこそ見える星空に感動した学校の先生が校歌を作詞されたそう。ないからこそあるものの象徴として、団体名に取り入れた。こうして「ほしはら山のがっこう」は、都市農村交流の場として新たな扉をひらくこととなった。

みんなでつなぐふるさと〜地域住民、体験スタッフ、そして参加（交流）者

年間を通じた交流イベントがはじまったとき意識したのは、だれもが主役で楽しくすごせるフラットな関係づくりだ。

地域住民は、実際の暮らしそのものを体験として教える。いつも何気なくやっていることを



「ぼくもやってみたい」環境整備活動で網戸の交換を手伝う子どもたち



「稲を束ねるときは、こがぁにいますんでえ」生き生きと伝える地元農家さん。みんなが楽しい体験交流

最高に喜んでもらえて元氣と誇りが湧く。

自然体験系の諸団体の指導者研修を受けた地域内外のスタッフは、専門職として企画コーディネートを担い、目的の認識や安全管理、地域と交流者をつなぐ様々な調整などを行いながら、地域住民や参加者との交流を楽しみ、やりがいと生きがいを得る。

高校生から社会人までのボランティアスタッフは、体験サポーターをしながら、地域体験の楽しさとスタッフとしてのやりがいや仲間を得る。

そして参加（交流）者は、思いっきり地域を感じて遊び楽しむ。それが地域に元氣を届ける。「子どもの声が聞こえると元氣になるんよ」「学校に明かりが灯って嬉しい」などの声を地域の方々からもらうてさらに元氣をもらおう。

廃校後17年間、地域住民と交流者が一緒に続けてきた地域運動会もすっかり定着した。名物競技の「縄ない競争」や「リム転がし」は笑い声いっぱい。校舎環境整備や夏祭りなども同様に、ここをふるさとと思っているみんなで継続している。

地域全体が活動フィールド

わたしたちの体験フィールドは、地域の方個人の田んぼや畑・里山、そして地域全体だ。そしてそこに暮らす人々が醸し出す風土だ。

その中でこそできるのが「キャンプインキャンプ」だ。それは「子ども長期キャンプ」の企画会議で生まれた。

「ワシらが子どもの時は、シートを持って、子どもだけで池のほとりでキャンプをしよう。家からフライパンを持って行って焼き火しりしたもんよ」という思い出話から、「そんな経験を今の子どもたちにもさせたいのお。生きる力につながる」と具体化された名物企画だ。長期キャンプのベース地から班ごとに一泊二日間地域に飛び出していく冒険。

ルールは、①24時間施設に帰れない②大人は手伝えない③地域の方と交渉して野営場所を決めたりトイレを借りたり火を焚いたりする④テント泊してもいいし野宿してもいい⑤持ち物も過ごし方も班で考える。

子どもたちはドキドキしながら地域の方と交渉をする。「マッチが濡れたので貸してほしい」「釣った魚を焼くので塩を分けてほしい」などだ。ある年「風呂を貸してほしい」と交渉した班があった。お礼に伺ったら、「昔はもらい風



この町に暮らす人だけでは地域はもたないと悩んでいた時、ここをふるさとと思って大切にしてくれる人々と出会った。ありがとう

呂というものがあつたのを思い出したよ」と笑顔で応えてくださった。「農作業を手伝うので山頂まで荷物を運んでほしい」と交渉をし、牛の草運びや飼料運びを手伝い、人まで載せていってもらったという武勇伝を持ち帰った班もあった。地域全体で参加者をわが町の子のように見守る。思い出は一子どもたちの心に残り、人生を豊かに変えるだろう。このキャンプもまた17年目。当時参加者だった子どもたちがスタッフになって帰ってきている姿を見て、継続

の喜びを感じている。

ふるさとを100年後の子どもたちにつなぎたい

私たちは今、インターネットを通して多くの情報を得ることができる。だけど五感を通して得られる直接体験と感情、なにより人との出会いなくして、人生を本当の意味で豊かにすることはできない。

中でも今、未来を担う子どもたちの日常から、「シゴト」体験の機会が失われている。「シゴト」とは、おカネを得るためではなく、暮らしそのものをこの手で創りつなぐコトを指す。

例えば、火を使う、田畑で種をまき育て収穫する、肉を獲りさばき料理する、梅干しを漬ける、お茶を炒る、草や柴を刈る、子守りをする、お坊さんを家に迎えたり墓参りをしたりする、生死に立ちあう、祭りに関わる、障子を変える、月明かりを生かす、野山の食べ物を食べるなど。

子どもたちに暮らすためのシゴトをしている大人を見たり、手伝ったり、マネごとをしたりする機会がないのだ。

しかし、このシゴトの中には生きる実感がある。一人ひとりの関わりが暮らしを創り、育み、未来を描いていることが目の前で見え、実感できる。

私たち大人には自然と共に生きる感性を子



「ここに一晚テントを張って泊まらせてください」「お礼に草刈りをします」キャンピングキャンプで地域の方とふれあう子どもたち

どもたちにつなぐ義務がある。例えば、田んぼの泥に足を踏み入れる感触が、そこに棲む生きものたちと遊んだ記憶と共に呼び起こされる人が、社会人や政治家として、また選挙で一票を投じる人として、そしてお金という一票を日々の生活で投票する人として社会を構成している。きっと「ふるさと」というかけがえのない場所は未来に大切につながっていくのではないか。

2019年度校舎利用者数は延べ4009人となった。また2020年度から市の指定管理施設としての運営がスタートした。

ふるさとを想う人が、手を取り合っていないでいくふるさとの未来への挑戦は続いている。

(特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう

理事・事務局長 浦田愛)